



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

1995年7月31日

AJEL

No.54

1. 第16回定期大会を開催

- 記念講演
- シンポジウム
- 2. 定期大会総会議事
- 3. 理事会報告
- 4. 定期大会・研究発表
- 5. 学術・文化情報
- 6. 事務局から
- 『年報』第16号論文等の募集

1. 第16回定期大会開かれる

地域研究としてのラ米研究に焦点

第16回定期大会が6月17、18日の両日、新緑映える東京大学駒場キャンパスで開催された。2日間で延べ120人の会員が参加したが、大会1日目の総会は役員の非改選期に当ったこと也有って、理事会の報告や94年度決算、95年度予算(表参照)が順調に承認され、記念講演およびシンポジウムで取り上げられた「地域研究」が大会の焦点となった。記念講演者として招かれた板垣雄三・日本中東学会会長は「今は新しいディシプリンを求め、地域研究を思い切って組み替える必要がある」とゲキを飛ばされた。シンポジウムでは研究・教育機関や研究者によって「地域研究」の捉え方の違いが現れたが、ニーズがますます高まる状況にあり態勢整備を急ぐ必要のある点では意見の一致をみた。

研究発表は、1日目4分科会、2日目3分科会で合わせて26人が行い、活発に討議された。テーマの広がりがみられる一方で、政治、経済についての発表が少なかったのが目立った。

【94年度決算】

収入の部	
1. 前年度繰越金	3,089,087円
2. 会費収入	2,674,000
3. 年報売上	21,700
4. 利子収入	498,649
合計	<u>6,283,436</u>

支出の部

1. 印刷費(会報・年報)	2,404,330円
2. 郵送・通信費	522,560
3. 交通費	150,600
4. 消耗品費	41,124
5. 人件費(事務局)	525,340
6. 研究部会助成	29,713
7. 第15、16回大会準備	436,587
8. 年報編集費	52,149
9. 次年度繰越金	2,121,033
合計	<u>6,283,436</u>

【95年度予算】

収入の部	
1. 前年度繰越金	2,121,033円
2. 会費収入	2,725,000
3. 年報売上	20,000
4. 利子収入	1,082
合計	<u>4,867,115</u>

支出の部

1. 印刷費(会報・年報)	1,300,000円
2. 郵送・通信費	400,000
3. 交通費	150,000
4. 消耗品費	50,000
5. 人件費(事務局)	500,000
6. 研究部会助成	100,000
7. 第17回大会準備	500,000
8. 年報編集費	50,000
9. 次年度繰越金	1,817,115
合計	<u>4,867,115</u>

○記念講演 地域研究の可能性

「各地域の枠を越え新しい専門領域を」

本記念講演は、今日の大学改革および現実の問題群の解決に既存の学問体系のあり方が問われる中で企画された。講演者は日本中東学会会長で日本学術會議会員の板垣雄三・東京経済大学教授である。自らの研究経験から、ラテンアメリカと中東が深く係わっていることを示し、それゆえに各地域研究の枠を超えて交流し新しい学問の領域の拡がりをめざすということが主な内容であった。発言要旨は以下のとおりである。

* * *

近代の学問の根本を見直す時、パラダイム・シフトを考えなければならない。私案「知の組織図」は、ありとあらゆる地域の個別的具体的な実態に合わせて総合的な知識のあり方を探るためのモデルとして提出したものである。地域研究者というものはフィールド・リサーチの中ですぐれた戦略家でなければならない。

「今日、自分の専門からのみものを言うことは、極端に言えば犯罪的である」と指摘する。第2次世界大戦後の学際アプローチ、境界領域研究はまだ既成の学術専門分野である旧来のディシプリンへの淡い期待が持てた時代のものである。今は新しいディシプリンを求め、トランス・ディシプリンナリィな脱構築をためす実験の時である。日本流の地域研究ディシプリンは、生態・環境・資源といった自然科学的アプローチが学問全体に及んでいる点が特徴となっている。

既存の学問体系にダイナマイトを仕かけると共に、地域も思い切って組みかえる必要がある。20年ほど前に提案した作業モデル「n地域」がある。ある社会に埋め込まれた差別体制の重層構造を拡大再生産する力をPとし、差別を克服しようとする民族運動をQ、それに対抗・対応する政治イデオロギーの組織をRとすると、P×R対Qというベクトルが働く場をn地域と考える。最小の単位は個人であり、n地域は宇宙空間まで含むことになっている。文明研究としての地域研究はこうしたダイナミックな組み換えに耐えうるもので

なくてはならない。

また、地域を固定して研究できるのかという問題がある。すでに、北米とラテンアメリカとのオーバーラップという問題もある。中東に引き付けて言えば、中東の拡張、「世界の中東化」である。たとえば、異なる地域間を比較する方向を模索する必要がある。こうしたネットワーキングによってグローバル・スタディズの可能性が出てくる。

会場からは、恒川氏より、「既存のディシプリンをひっくり返すためには、ディシプリンを知らなければならないのではないか。地域研究は既存のディシプリンに触れないまま、地域に入っていくことに問題があるのではないか」との質問が出された。これに対して、「私自身の経路を考えると、先人たちの仕事をどれだけちゃんと勉強したかは疑問、世の中そんなもんだ。若い人は勝手にやって進んでいく。大学改革など学問の方向づけをしているひとには悩みがつきないが」と、終始ユーモアにあふれ、知的刺激に満ちた一時間半であった。

(浅香幸枝)

○シンポジウム

「地域研究」としてのラテンアメリカ研究 研究・教育態勢の現状と展望を議論

司 会

恒川 恵市 (東京大学)

パネラー

石井 章 (アジア経済研究所)

友枝 啓泰 (国立民族学博物館)

染田 秀藤 (大阪外国语大学)

細野 昭雄 (筑波大学)

G・アンドラーデ (上智大学)

辻 豊治 (京都外国语大学)

コメンテーター

国本 伊代 (中央大学)

逕野井茂雄 (富山国際大学)

本年のシンポジウムは、アジア経済研究所とJETRO (日本貿易振興会)との統合方針の発表や、国立民族学博物館における地域研究企画交流センターの発足など、地域研究を

めぐる制度環境が大きく変化しつつあるとの認識から、制度としてのラテンアメリカ研究の現状と将来展望に焦点をあてることになった。

* * *

まず6人のパネラーが、それぞれの所属機関の研究・教育実績や制度改革の現状について報告した後、2人のコメンテーターがいくつかの論点を提起した。（敬称略）

パネラーの報告の中で、アジア経済研究所の石井章は、研究所でのラテンアメリカ地域研究は、1962年という早い時期に、研究会方式で始まり、図書出版物の発行や研究会の組織などを通して、日本のラテンアメリカ研究に多大の貢献をしてきたことを力説した。国立民族学博物館の友枝啓泰は、民博でのラテンアメリカ研究は、フィールド、学際性、共同研究を重視して多大の成果をあげてきたが、現在、学際性の点でより広く拡大していく必要が生じており、今回民博内に設立された地域研究企画交流センターには、そうした面での仕事が期待されていると指摘した。

大阪外国语大学の染田秀藤は、研究・教育機能を併せ持つ大学の教員として、外国语学科中心の組織から地域研究学科への再編に参加した経験をもとに、理念と現実が必ずしも一致しないところからくる困難について語った。同じく大学人として、筑波大学の細野昭雄は、糺余曲折を経つつも、筑波大学におけるラテンアメリカ研究が、大学院地域研究研究科を中心に、新設の国際政治経済研究科等へも広がってきている点を明らかにした。上智大学のアンドラーデは、1964年に設立されたイベロアメリカ研究所が、当初は予算なしで、小さな研究会から出発したこと、それが今日では学内でも大きな研究所に育ったことを、共同研究や講演会活動などの紹介をまじえて説明した。

最後に京都外国语大学の辻豊治は、メキシコ研究センターが大学教育を補助する様々な活動をしてきたことを説明したほか、高校における世界史の必修化にともない、大学の外国语学科を地域研究学科に再編する可能性と必要性が生まれていること、日本では全体としてラテンアメリカが身近な存在に感じられ

るようになってきていて、ラテンアメリカ地域研究にとって有利な状況が生じていることを指摘した。

以上の報告に対して、コメンテーターである中央大学の国本伊代は、研究機関によってラテンアメリカについての研究・教育体制に大きな差があるが、全体として、例えば図書類の豊富さで知られるイベロアメリカ研究所ですら米国の大学図書館と比べて著しく小規模であり、またこれまで多大な貢献をしてきたアジ研が統合させられるということもあり、日本の現状がラテンアメリカ研究の拡大にとって有利だとは考えられないと指摘した。

富山国際大学の逕野井茂雄は、アジ研問題について、統合よりも移転によって、資料利用や研究会活動がしにくくなり、結果として外部の研究者に開かれた組織としての機能が失われる恐れがあると語った。さらに逎野井は、北陸地方ではラテンアメリカへの関心は高いが、それに応えられるインフラが欠如しており、地域研究企画交流センターやラテンアメリカ学会が、インフラ整備の役割を果たすことが重要だと指摘した。

会場からの質問やコメントは多岐に渡ったが、報告者からの回答や発言を通して、アジ研は外部に開かれた組織としての良さは失われるかもしれないが、研究機関としての基礎は変わらないだろうということ、地域研究企画交流センターは現在はごく小規模だが、徐々に組織と機能を拡大する予定であること、教育に関しては、教員配置の限界からくる困難を抱えている機関もあるが、全体として少なくとも修士レベルまでの教育に十分な体制が整っていること、研究・教育機関の図書・資料のデータベース化が進んでおり、インターネットを通じての検索も一部可能になっていること、などが明らかになった。

また地域研究の位置づけについて、冷戦後の今日、諸地域の比較研究が重要性をもつようになっていること、様々な分野の資料を現地で収集するフィールド・サイエンスとしての地域研究の意義が増していることが指摘された。

（恒川惠市）

2. 定期大会総会議事

日時：1995年6月17日

場所：東京大学教養学部

定期大会は39名（ほか委任状128）が出席、染田秀藤会員（大阪外国语大学）を議長に選出したのち審議に入った。北森絵里（天理大学）、子安昭子（上智大学）が書記をつとめた。理事長より阪神大震災被災会員への見舞いの言葉が述べられた。

1. 監事選挙

昨年の大会で監事2名の選出を行なわなかたため、木村栄一、藤田富雄両監事の留任を事後承認した。

2. 事務局移転

理事長転職に伴い、学会事務局の国立民族学博物館地域研究企画交流センターへの移転を了承した。

3. 事業報告

1) 会員数が449名（うち準会員3名、賛助会員8件）になった旨報告があった。

2) 活動報告：理事長より、理事会開催、研究部会、年報（16号）ならびに会報（50～53号）発行について報告があった。

3) 國際交流：94年3月8日開催のLASAとの交流会議、94年7月の第48回国際アメリカニスト会議への本学会よりの参加状況ならびに、同年12月13日の文部省成果公開学術講演会などについて報告があった。

4. 94年度決算報告ならびに同監査報告が了承された。

5. 95年度事業計画

理事長より、以下の点について説明があった。

1) 次期大会開催地：国立民族学博物館に決定。来年度は選舉年でもあるので、それに向けて会員名簿の作成を行なう。

2) 国際交流：本年9月末にワシントンで開催されるLASA大会に「日米パネル」が設置され、LASAのPeter Smith氏とアンドラーデ理事が共同司会を、西島章次会員とRobert K. McCleery氏が発表を行なう予定である。またLASAと

のjoint membershipについて、会費納入の延滞やLASA大会への出席が少ないなど、なかだるみ傾向がみられるので、積極的な参加が望まれる。

3) 科研費利用に積極的に取り組む方針で、研究成果公開講演会に申請中である。

6. 95年度予算案

田中理事より説明があり、了承された。承認に先立ち会費滞納者が42名おり、退会を含め理事会で対応を検討中であること、また繰越金額が減少傾向にあるため、将来的に会費の値上げの検討もあり得ることが説明された。

7. LASA団体割り引き料金の改定提案

理事長より、割引き料金について現在の3カテゴリーから単一化する料金改定の方針が示され、理事会に一任してほしいとの提案があり了承された。次回理事会で検討される予定。

3. 理事会報告

○第73回理事会

日 時：1995年6月17日（土）

場 所：東京大学教養学部

出席者：山田理事長、アンドラーデ、石井、松下、細野、田中、畠、三田、二村、堀坂（書記）

1. 総会議事次第を検討し、承認した。
2. 総会提出予定の94年度決算案および95年度予算案を決定した。
3. 94年度の事業報告および95年度の事業計画を理事長の提案のとおり承認した。
4. 次期大会（第17回）の開催を国立民族博物館に決定した。
5. 新入会員9名、新入賛助会員1を承認した。

4. 定期大会・研究発表

第16回大会での研究発表は、2日間合わせて7つの分科会で26人が行った。以下は、各分科会の司会者による報告である。ただし1日目第4分科会および2日目第3分科会については、報告が編集期日に間に合わなかったため、大会プログラムからの要約である。

（敬称略）

第1日目（6月17日）第1分科会

司会 狐崎知己（専修大学）

中米・カリブ地域を対象とした自由論題として4人の報告が行なわれた。例年にくらべて今年はとりわけ報告・討議時間が制約されていたため、各論者への質問を3件に制限せざるをえなかったことが残念であった。

○ニカラグア：ソモサ独裁政権成立の歴史的背景

小原雅彦（愛知県立津島高等学校）

ソモサが政権を奪取出来たのは、彼が国家警備隊司令官であったこと、米国への従属下でその意向が重要であったことがよく指摘されるが、それは①ソモサ以前はカウディーリョ的政治体制であった、②保守党に対し経済的に優勢となった自由党が「護憲戦争」後政権を握るが、米軍占領下で統治能力を弱めていた、③地主層は恐慌で経済的打撃を受け、さらにサンディーノ派農民や労働運動に対し有効な対策を取れないでいた、という状況下において強調されるべきである。

また政権強化の理由としては、①軍事力・政治力を利用し大地主となることでカウディーリョ層と肩を並べ、さらに大資本家に成長して経済的優位を固めた、②反対派の一部抱き込みを絶えず図った、③反対派の保守党は分裂し、カウディーリョ的体質から脱皮出来ず他勢力との政策連合を形成し得なかつたし、一方独自の活動を漸く始めた労働者層は弾圧に抗しきれなかつた、④政権を合法化し反撃の口実を与えてくした、⑤国家警察隊を私軍化した、⑥行政権限を強化した、⑦米の権益を保障した——などの点を挙げることが出来る。

○キューバ革命とサトウキビプランター

『コロノ』—農業改革の評価をめぐって

小林和宏（立命館大校研修生）

キューバ革命前のサトウキビの生産は、製糖資本と栽培契約を結んだコロノと呼ばれる農民層によって担われていた。30年代の砂糖経済の危機によって苦況に陥った彼らは、製糖資本に対する経済的要求を強めていき、民

族主義的なキューバ革命の支持基盤となつた。革命後公布された第1次農業改革法は、コロノに特別な位置が与えられるなど、小農経営の育成を目的とした性格だったが、4年後の第2次農業改革法に至る過程の中で集団農場の組織を中心とした路線へ転換した。革命指導者たちは、革命前の経済構造における不平等な土地所有構造や失業、貧困などの否定的現象を強調するあまり、コロノの持っていた効率的な労働力の投資方式など剩余価値の蓄積における優位な側面を見過ごし、「規模の経済」と農業労働者の雇用の安定のみを追求したのだった。その後のキューバ農業は、國家機構を通じて「上からの資本蓄積」を行なおうとしたが、その路線は失敗に終わっている。

○ホンジュラスにおける大学病院の利用状況

大原久美子（東京女子医大）

ホンジュラス保健省の医療機関の中で最も高度な専門性を有し、医者の教育機関でもある大学病院の機能は、本来、他の保健施設では対応困難な紹介例を優先的に受け入れ、適切に対応することである。しかし実際は、外来・救急共に保健所、又は第一線病院と何ら変わらない一般的な症例の治療に追われているのが現状である。今回の患者およびカルテ調査で、救急患者のわずかに26%のみが本来の大学病院救急室で対処すべき重症かつ緊急な症例であること、受診者のわずかに15%が他の機関からの紹介患者であったこと、かつそのうち34%が中間の医療施設を飛び越えて、保健所から直接大学病院に紹介されている問題点が指摘された。これら大学病院の需要超過に基づく多くの問題を解決するには、首都圏の保健施設・システムの再構築と、施設の効率的な利用に関する住民教育が必要である。

○国際社会のハイチにおける

“民主化”に関する考察

片桐未佳（国際高麗学会）

94年10月亡命していたアリストイド・ハイチ大統領が復権し、軍部が退散してから、同国内の混乱は一見解決した様に思える。が、

復権後のアリストイド政権には、着実に民主国家に転向するための課題・難問が山積みされている。

本報告では、国連ハイチ監視団の力を借りて登用している、6000人規模の多国籍軍の軍人、約400人から成る文民警察に焦点を置き、これまでの援助や制裁などとは違ったハイチの国際関係について述べた。

結論に重きを置き、アメリカの姿勢や、ハイチにおけるプロパガンダのあり方、残されたアリストイド政権の課題などを網羅した。

また、未解決の難民問題・貧困問題等ハイチにおける人権問題にも触れ、国民の識字率を上げ、あらゆる問題に対応できるような教育を課題とすることを提言した。

第2分科会 司会 斎藤文子（東京大学）

第2分科会では4つの発表があった。それぞれラテンアメリカを扱っているということ以外、ほとんど共通点がなく、全体を包括するテーマを見いだすのはきわめて難しいが、ラテンアメリカ地域を正攻法というより、むしろ奇策で攻める分科会であったように思われる。その意味で刺激の多い分科会であった。

最初の発表者グスタボ・アンドラーデ（上智大学イペロアメリカ研究所）は、「初めて来日したコロンビア人ニコラス・タンコについて」の報告をした。ニコラス・タンコは19世紀後半、中国人労働者を雇い入れる目的でたびたび中国を訪れていた人物で、明治4年に来日、2ヶ月間滞在して日本回想録を書いている。発表では、太平洋を股にかけて活躍したタンコの生涯や、彼が日本および日本人をどう見たかといったことが紹介された。発表後、タンコが日本を中国とどう比較しているかという質問や、ボゴタ生まれとはいえ、生涯の多くの部分を海外で過ごしたタンコをコロンビア人と規定してよいかなどの指摘があった。

二つ目の発表は、志柿光浩（東北大学）が「ラテンアメリカ・カリブ地域は『第三世界』か？ — 日本の中學・高校教科書における記述の分析」という問題提起の形の報告を行った。第三世界に関する大学生の意識調査と平

成6年度の中學・高校の教科書における記述、定義の仕方、ラテンアメリカ・カリブ地域の捉えられ方を調査した結果、地域研究の基本的な共通概念である「第三世界」が学校教育においては、必ずしも十分に正確に理解されていないと分析した。冷戦構造終焉後、この概念の有効性の再検討が迫られていることも指摘した。

三人目の発表者、大平秀一（出光美術館）による「日本における新大陸の登場 — 南蛮系世界図と新大陸認識」は、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて、日本人の手によって屏風に描かれた世界地図と、それに付随した世界の民族図を、出光美術館所蔵のものを中心にして、多数のスライドで紹介した。16世紀の日本人が世界を、そして新大陸を、伝説と事実を混同させて認識していたことが視覚イメージで提示され、興味深い報告であった。

最後の発表は、横山和加子（慶應義塾大学）による「インディオと教会堂—17世紀ミチョアカン地方の事例から」で、発表者が現地で収集した数多くの事例をスライドで見せながら、17世紀メキシコのタラスコ族の村落における教会堂の独特の様式の普及・定着・持続を跡づけ、この地域の先住民世界で進行していた社会・文化的変容と関連づけることを試みた。

全体の発表時間が短縮されたため、それぞれの発表の質問時間を5分間に区切らざるをえなかつたが、活発な質疑応答がなされた。

第3分科会 司会 二村久則（名古屋大学）

この分科会での報告はすべてメキシコに関するものであり、しかも現代政治を取り上げた第1報告を除けば、すべて何らかの意味で先住民問題に関わる報告だったので、テーマが相互に関連したまとまりのあるセッションとなった。惜しむらくは、報告4本でわずか100分という極めて厳しい時間的制約のため、充分な議論が尽くせなかつたことである。現代ラテンアメリカにとって大変重要な問題が提起されていたと思われるので、各地域の研究部会など別の機会に改めて議論できる場がもてれば幸いである。

第1報告の斎藤泰雄（国立教育研究所）の「メキシコの政治エリートのアカデミック・プロフィール」では、現セディージョ政権の閣僚25人の学歴構成の分析を中心に、メキシコの政治エリートたちの高学歴化の実態と、平均学歴が小学校卒業程度という一般国民の教育の現状との乖離について論じ、教育面からメキシコ政治の問題点を浮き彫りにした。フロアからは、NAFTA（北米自由貿易協定）結成のような重大な政策決定と政治エリートの高学歴化との関連を問う質問などが出された。

第2報告のニナ・ユイ・デ・ハセガワ（東京外国语大学）「ボサダ研究の新しい視点を探る」は、有名なメキシコの画家ボサダを取り上げ、従来定説とされてきた“革命の画家ボサダ”を否定し、庶民の生活を描いた画家としての新しいボサダ像を提案した。この報告に対しては、革命イデオロギーとボサダとの関連についてなどの質問が出された。

第3報告のカルロス・ビセンテ・フェルナンデス・コボ（京都産業大学）の*Comunidades indígenas versus procesos de modernización*は、経済的自由主義の波、世界市場の統合など、近年における新しい近代化過程の中で、メキシコ等の諸国において先住民共同体がいかに対応しているか、またいかに対応していくべきかを、文化という文脈のなかで論じた。当然ながら、サバティスタ運動を意識した質問が出され、武装闘争の可能性について議論がなされた。

第4報告の角川雅樹（東海大学）「インディヘニスマの心理的側面について」では、インディオ的要素に対するメキシコ人の対応の仕方を広い意味でのインディヘニスマと規定した上で、メキシコ社会の中の階層構造とインディヘニスマとの関わりについて、とくに社会心理学的な視点からの分析がなされた。報告者が例として取り上げたUd.とtúの使い分けに関してフロアから体験に基づいた様々な意見が出され、議論がいっとうき盛り上がった。

第4分科会 司会 木村秀雄（東京大学）

○ ブラジル都市貧困層にみられる

「現実」の語り方 — リオデジャ

ネイロの Favela と Conjunto

Habitacional の住民に対する

インタビューを中心

北森絵里（天理大学）

リオデジャネイロの Favela と Conjunto

Habitacional の住民に、置かれている現状や人生について語ってもらうと、複数のインフォーマントの間に共通する語りがあることに気づかされる。彼らは、常に、経済的に豊かな層と自らを対比させながら、物理的経済的にいかに貧しいか、政治的・社会的にいかに見捨てられているかを説明し、一方で精神的な正直さと豊かさを強調する。本報告では、以上のようなリオの貧困層にみられる「現実」の語りがどのような場において語られ、そのきっかけは何かに言及し、その「現実」の語りが、ブラジルの政治と知が創り上げてきた貧困層のモデルであることを明らかにした。

次期大会は大阪の民博で

第17回、6月8、9の両日

6月17日開催の理事会で、次期第17回大会の会場に国立民族博物館を決定した。民博の規定で同館との共催の形式になるが、これによって国立大学で必要とされる会場費は免除される。

すでに最寄りのオーサカ・サンパレス・ホテルには、シングル35室、ダブル若干数の予約枠が確保してあるので、本会の名を告げて、予約することができる。価格1泊6500円（税別）が基本。

電話：06-878-3804

fax：06-878-3456

住所：大阪府吹田市千里万博公園1-5

最寄り駅：モノレール万博公園下車5分

会場へ徒歩15分

他の会場近辺のホテルにも順次割引交渉の予定である。

○「歴史」が生成する場：クスコにおける
インカ主義との関係より

細谷広美（国立民族学博物館）

・外来研究員

ペルーにおいてインディオの王国であったインカ帝国は、白人やメスティーソ層にとって、欧米と対峙する際の誇りとアイデンティティの源泉となっている。しかしながら、現実のインディオは社会の中でマージナルな位置づけにある。このような矛盾を解決する修辞が、インディオを「インカ帝国の子孫」とおき、彼らの文化をインカ文明を継承するものとしておくことにある。

ペルー社会にはこのようなインカ主義が存在するが、これは必ずしも「インディオ」たちによって共有されているというわけではない。本発表では、村落内で語られる口頭伝承としての「歴史」、村落社会における「インカ」の意味の多様性を、ペルーのクスコ県で実施したフィールドワークで得たデータをもとに検討した。そして、このことを通じて、先住民族社会と「国家の歴史」の関係について考察を加えた。

○ペルー・チャンカイ谷の日本人移民

— 綿花王・岡田幾松を中心に

稻村哲也（愛知県立大学）

岡田幾松は明治32年（1899年）の第1回航海によるペルー移住者のひとりである。ペルーの初期移民の中では例外的に、アシエンダ経営者となり、「綿花王」と呼ばれた。報告者は野外民族博物館としてカサ・グランデ（領主館）復元事業（1998年）を指揮したが、その復元モデルとしたのが岡田経営のアシエンダのひとつ「カキ」であった。復元事業の前後に、「カキ」の元ヤナコン（小作人）、岡田の親族等関係者をインタビューした。本報告では岡田の生涯をなぞることによって、チャンカイ谷におけるペルー日本人移民の実態を描いた。

第2日目（6月18日）第1分科会

「現代社会と遺跡保存」

司会 大貫良夫（東京大学）

遺跡は、今日多くの観光客を引きつけるよ

うになり、観光資源としての価値が見直されるようになった。そして遺跡をめぐってさまざまな関係者がそれぞれの関わり方をするようになり、研究者もまたそのような関係の網目から自由ではいられなくなった。昨年は日本の手によって二つの遺跡博物館が開設された。その仕事に携わった当事者を含めて、遺跡・研究・保存・観光・地域住民の関係を検討してみようというのが、本分科会の主旨である。発表は次の通りで、参加者も多く、盛況であった。

○マヤ文明遺跡観光

— 文化生産と消費の観点から

池田光穂（熊本大学）

マヤ地域ではルータ・マヤ計画やムンド・マヤ計画が、メキシコその他中米の諸国間の共同計画として推進されつつある。マヤ地域での観光はどのような形で行われているか、観光人類学の調査の結果の一部を紹介する。マヤ文明遺跡が観光客を引きつけるのは、未だ解明されない「失われた文明」というイメージによってである。そして考古学の成果は謎解きの一部として、ガイドやガイドブックを通して、観光客に提示される。これによってイメージは信憑性・正当性・権威を付与される。いわば文化遺産の価値に関する社会的合意が成立する。一方で、この合意に必ずしも適合しないイメージも生産される。冒険映画の中の遺跡や考古学者などの描き方はその一例である。遺跡はもはや考古学者だけの手中にあるのではなく、さまざまな関係者のイメージ生産の材料であり、研究者やその成果もそうした生産と消費の関係の中にある。

○『盗掘者の論理』と『発掘者の論理』

— ペルー北部の遺跡保護をめぐる問題

関 雄二（天理大学）

ペルー北部とくに海岸地方の遺跡の荒廃には、自然的要因と人為的要因の二つがある。ペルーでの遺跡荒らしには、人為的要因中の盗掘が特異な性格を帶びている。そこには、クランデーロという占い師やその儀礼もからんでいる。この盗掘では、行為者と遺跡を残

した過去の文化の担い手とは連続しないという歴史観が基盤にあるらしい。遺跡の保護について、遺跡に寄せられるさまざまな価値観の調整役として、考古学者の役割が重要である。

○開発途上国における遺跡保存と地域社会 — ホンジュラスの事例から

中村誠一（民族学振興会）

日本とホンジュラス両政府の合意により、青年海外協力隊ならびに国際協力事業団が1984年から遺跡調査、発掘、復元、遺跡公園の建設という一連の事業を実施し、昨年完成をみた。ホンジュラス側の対応が非常によく、人材・機材・資金の組み合わせもあり、援助事業は着実に成果を上げた。さらに協力隊の若者たちが地域住民の間に住み込みながら仕事を進めたので、住民の意識に変化が生じ、住民による遺跡保存の気運も高まり、遺跡保存と地域発展との結びつきへの理解が深まった。ただ、日本の行政の枠の中での仕事のため、遺跡発掘の学術面での仕事が滞りがちであるのは残念である。

○クントゥル・ワシ遺跡と博物館建設

加藤泰建（埼玉大学）

ペルー北高地のクントゥル・ワシ遺跡の発掘で、黄金製品をはじめ重要な遺物が多数出土した。これらの遺物の帰属をめぐって地元住民、国の法律、国家、そして日本の調査団が、複雑なプロセスを作り出すことになった。調査団は日本で展覧会を開催し、募金活動を行い、その資金で博物館を建設、フジモリ大統領を招いて昨年開館式をあげた。価値のある遺物が出て、考古学者からその価値の説明を受けて、住民は遺跡保存の意義を認識するに至った。博物館は立派な建物と内装を持ち、地方行政当局の関心も集めた。この博物館を守るために、行政は水道の普及、道路の改修などを行った。博物館の運営は地元住民に任せられ、町や都会からの不信感をはねかえすべく、住民は見事に運営の才能を發揮している。この例でも、住民と一体になっての仕事、住民への啓蒙と信頼がいかに大切かがわかる。

遺跡博物館は立派なものを作ったが故に、そして住民がこれを支える故に、地域の社会的経済的発展をもたらすことになった。

第2分科会 司会 三田千代子（上智大学）

○ブラジル日系エスニック集団における

アイデンティティの変容 — 来日している日系ブラジル人の家族の場合 —
エウニセ・A・イシカワ・コガ

（お茶の水女子大学）

○1970年代初頭来日ブラジル出身日系人の コミュニティーと婚姻 — 大阪および 尼崎に定住するブラジル出身沖縄人の 事例からの一考察 —

田島久歳（西墟国際大学）

○マイノリティー文学とブラジル

平田恵津子（大阪外国语大学）

本分科会では、ブラジル移民のエスニック・アイデンティティおよびエスニック集団を共通テーマとする上記3研究の報告が行われた。

コガと田島はいずれも、在日日系ブラジル人のフィールド調査に基づいた発表を行った。コガは、直接面接を通じて得られた資料を用いて、在日日系ブラジル人のアイデンティティの変化を追った。在日日系ブラジル人は自己を日本社会と対象化させることによってまず、「日本人」から「ブラジル人」にそのアイデンティティーを変化させ、さらに日本滞在の長期化に伴い「ブラジル人」から「よりよいブラジル人」へと変化させていく過程を分析した。この日系人のアイデンティティーの変化をコガは、「のれん」の掛け替えという大変興味深い表現を用い、印象に残る発表となった。

田島は、60年代末からのブラジルの高度経済成長と70年の大阪万博によってもたらされたブラジル日本人の訪日ブームの時期に日本を訪れ、大阪と尼崎に定住することとなった沖縄出身のブラジル移民のコミュニティーの調査結果を発表した。コミュニティーの形成とその機能の維持強化に影響を与えたブラジルから携えた文化的要素と、日本で新たに獲得した文化的要素の分析考察を行った。さら

に、コミュニティー成員の通婚圏の分析を通じて、沖縄出身のブラジル移民の日本社会での複雑なネットワークの形成の一端が紹介された。沖縄移民がブラジル起源、日本起源、沖縄起源とされる各文化的資本を獲得する諸状況と諸段階の考察は、沖縄移民のブラジルでの社会的状況を反映したもので興味深いものであった。

平田は、文学作品を通じてブラジル移民のエスニック・アイデンティティーの問題を取り上げた。すなわち、ブラジル南部の都市ボルトアレグレ出身のユダヤ系作家モアシール・スクリアールの代表的小説の一つ *A estranha nação de Rafael Mendes* (1983) を、ブラジル社会のマイノリティーのアイデンティティーが主題として取り扱われた作品として取り上げたのである。父親の死を契機に、ユダヤ系ブラジル人としてアイデンティティーを覚醒させていく主人公の心の動きや葛藤を丁寧に分析した発表であった。作品がブラジルの移民のアイデンティティーを主題としたことによって、従来の移民の苦労話や出世物語とは異なる新たな視点をブラジルのマイノリティー文学に開いたものとして平田は、モアシールの作品を評価し、日本における今後のブラジル文学研究の深化に貢献する発表となった。

第3分科会「ラテンアメリカという修辞」

司会 鈴木 茂（東京外国語大学）

○ラテンアメリカ主義のレトリック：

ロド、ダリオ、バスコンセロス

柳原孝敦（成蹊大学）

ラテンアメリカ主義と呼びうるイデオロギーは、今世紀に入って文学・思想の分野で幾度も再生産されるが、それらはいずれも類似のレトリック（言い回し、論理の展開という程度の意味で）を踏襲することになる。アメリカ合衆国を敵と想定し、それに抗するにラテンアメリカ諸国の団結を唱え、あたかもその団結の軸であるかのように精神的価値を昂揚するその論旨は、まるで物語のような結構に収まってしまうし、「ラテンアメリカ」を表象するその仕方はナショナリストの言説の

国家の表象にもパラレルなものに見える。本発表では、そんな紋切り型のレトリックの中から、三人の作家のテクストを取り上げ検討した。ロドがいかにラテンアメリカ主義を特殊地方的なものから普遍的な問題へ転換したか、それを受け継いだルベン・ダリオが隠喩の配置によっていかに詩に歌い上げたか、バスコンセロスがラテンアメリカ主義の物語的レトリックをいかに本当の物語に転換してしまったかを示すことを目標とした。

○ラテンアメリカにおける

プロテスタンティズムの「発見」

大久保教宏（東京大学大学院）

19世紀初頭のラテンアメリカ諸国の独立は「近代化」の鐘を鳴らし、これを契機に植民地体制の一翼を担ったカトリック教会が、国家と対立の様相を深めていく。これは、政治的、社会的領域からカトリック教会を次第に排除するという意味での「世俗化」の進行を伴った。このとき法制上認められた「信教の自由」のゆえに、カトリック教会はその他の宗教との「衝突」を余儀なくされる。この「衝突」の一方の立役者として、その他の宗教の代表として、ラテンアメリカに「伝播」したのがプロテスタンティズムであった。

このような「近代化」、「世俗化」、宗教の「伝播」、「衝突」を検証することが、本発表の目的である。「近代化」の刺激を受けて拡大する「国民国家」が域内の様々なプロテスタンティズムを次々と「発見」した中米と、革命にむけて自立する北部にプロテスタンティズムの定着を見たメキシコを本発表ではとりあげた。

○『キューバ性』への志向

— F. オルティスのアフロキューバ

人研究

岩村健二郎（東京外国語大学大学院）

フェルナンド・オルティス（キューバ：1881-1969）は、犯罪学、社会学、民俗学、民族学、法学、経済学、政治学といった様々な領域で研究を行い、中でも「アフロキューバ人」を対象としたものは生涯に渡って続けら

れた。アフロキューバ文化を豊かな表現物として描くその後期の研究から時代を遡ると、次第に「精神的未開性」の下にアフロキューバ人を犯罪者とする、「人種」による規定を前提とした犯罪学研究に出会う。最初のアフロキューバ人に関する著作を出版した1906年から1940年までの約35年間に、「犯罪人」から「価値あるもの」へと主張を変化させるオルティスのアフロキューバ人研究には、一貫して「キューバ」とはどうあるべきかという思索、すなわち「キューバ性」への志向があった。本発表では、時代と共に内容を変化させるキューバの「国民的帰属」の主張の中で、「アフロキューバ人」（実体、イメージを含め）がどのように利用されてきたのかを明らかにすることを試みた。

○ラテンアメリカという修辞（レトリック）

病理というメタファ —<世紀末>

パラダイム研究の一ケース —

林 みどり（東京外国语大学大学院）

1880年代頃から1920年代頃までを、<世紀末>と名づけるとすると、この時期、ラテンアメリカの大部分の国では、ネイション・ステイト形成を第一の目標とする19世紀的な諸価値にたいする、修正がなされようとしていた。新旧もろもろの価値がぶつかりあい、砕けあい、相互浸透しあう、そういう<世紀末>的パラダイムにあっては、さまざまな対象や主題が連結されるための新たなレトリックが、新旧さまざまな諸価値のインタラクティヴのなかで出現してきた。

アルゼンチンにおける病理をめぐるメタファの変容も、<世紀末>的パラダイムにおけるレトリックの変容と切り離して考えるわけにはいかない。本発表では、まず最初に、19世紀半ばに生まれた「癌」というメタファと<世紀末>の「ウイルス」というメタファを比較検討する。そのうえで、「ウイルス」に感染した人間を隔離し治療して社会復帰をうながす制度や機関の設置、人間対象を分節するための技術の開発と専門家要請、ステロタイプの病人や狂人が大量に生産される言説的体系の構築を見てみた。

5. 学術・文化情報

○地域研究企画交流センターで

国際シンポジウムの参加者募集

本年12月4日—7日に地域研究企画交流センター企画の文部省国際シンポジウム、「ラテンアメリカの都市と農村」(Mundos urbanos y rurales en America Latina)が国立民族学博物館を会場として開催される。ラテンアメリカの地域像を都市と農村という視角から分析することをめざしている。ラテンアメリカはじめ、米国、カナダ、英国、フランスなどの研究者8人程度を招聘するほか、同センターの共同研究「農村開発の比較研究」に参加している国内のラテンアメリカ研究者が発表を行う。本学会から先着40名に限り参加を受け付ける。参加料は、無料だが、旅費、宿泊費などは本人負担。申し込み先は：

〒565 大阪府吹田市千里万博公園内

国立民族学博物館 地域研究企画交流センター

国際シンポジウム実行委員会

Fax : 06-878-8353

○『ラテンアメリカ・カリブ研究』

第2号が発行

筑波大学大学院を修了した若手研究者が中心となって編集されている『ラテンアメリカ・カリブ研究』第2号（編集責任者：田島久歳会員）が6月に発行された。同誌は昨年発刊、年1回程度の頻度で発行すること。第2号の主な内容は下記のとおりだが、ラテンアメリカ・カリブ地域の研究者に投稿を呼びかけている。原稿は日本語、スペイン語、ポルトガル語、英語のどれかで、400字詰め原稿用紙15枚程度（ただし研究論文は30枚）。希望者はつくば国際大学竹内研究室へ

（〒305 土浦市真鍋6-3960-1、

電話0298-26-6000）。

【寄稿】

地域研究の世紀末 飯島みどり

—地域研究者の自戒

—早大中南研のことなど … 田中 高

植民地期における異人種間の交渉と軋轢

..... 横山和加子

電子空間のサバティスタたち

..... 吉田 茂人

【海外報告】

ペルー・エクアドル国境紛争の歴史的背景

..... 楠 彰

国連モザンビーク活動参加報告

..... 高木 耕

【研究報告】

『Diamantes y pedernales』の小説世界

に関する一考察 伊藤 幸子

構造調整下のインフォーマル・セクター

-ペルーとロシアの事例から-

..... 富田 与

史料解説 -ディエゴ・ムニョス・

カマルゴ著「トラスカラ史」

..... 山名田浩美

【修士論文より】

ペルーにおける初等教育の現状と問題点

..... 城市 孝

ブラジルの経済成長と社会移動

..... 奥井 眩子

国際的コカイン密輸産業とコロンビア社会

..... 高木 耕

オクタビオ・パスとシェルレアリスト

..... 鼓 宗

○山田睦男会員に大同生命地域研究賞

大同生命国際文化基金はこのほど、1995年度大同生命地域研究奨励賞を本学会の山田睦男会員に授与することを決めた。理由は、「ブラジルを中心とするラテンアメリカ地域研究への貢献」。

6. 事務局から

1) 寄贈図書

[冊] *Cuadernos Hispanoamericanos 536*,
Instituto de Cooperación Iberoamericana,
1995. 2.

2) 新入会員（第73回理事会および持ち回り
理事会承認）

4) 1995年度 L A S A 口座決算報告書

収入の部

1. 前年度残金	1 0 2,8 4 5
2. 郵便振込	3 7 2,0 4 2
3. 現 金	8,3 6 0
4. 利子収入	1,0 8 2
計	4 8 4,3 2 9

支出の部

1. 会費振込	3 0 6,0 4 2
2. 送料・事務負担	2 0,0 0 0
計	3 2 6,0 4 2

残 金 1 5 8,2 8 7

注：払い込みの人数は計86人、なお5月25日に木村栄一、藤田富雄両監事の監査を受け、適切に処理されたと報告された。

編集後記

うつとうしい長雨が続いている。水不足の昨年を思うと様変わりである。願わくば、この会報がお手元に届いている時には、真夏のジリジリとした太陽が照り付けておりますよ

『年報』16号論文等の募集

『年報』16号(1996年6月刊行予定)に掲載するための論文等を下記の要領で募ります。投稿を希望される方は、論文・研究ノート・研究サーヴェイ・書評論文・書評の別、題目、分野、用語(日本語・英語・西語・ポルトガル語等)、予定枚数、氏名を、10月13日(金)までに書面にて編集委員会までお知らせください。

原稿の締切は1995年12月末日とし、審査の結果を通知いたします。審査を通過したものでも、審査委員の見解を伝えて修正・見直しをお願いすることがありますので、御承知ください。

原稿は未発表のものにかぎります。

ただし欧文の論文にかぎり、既発表の和文論文の翻訳も受け付けます。

○主題：学問分野を問わずラテンアメリカとその周辺地域に関連するものの。

○用紙：和文 1行20字詰横書原稿用紙。ワープロ使用の場合は、1行20字もしくは40字とし、総字数が簡単にわかるようにしてください。

欧文 市販タイプ用紙

○枚数：和文 論文(400字詰)60枚以内
研究ノート・研究サーヴェイ

50枚以内

書評論文 30枚以内

書評 10~20枚

欧文 論文 10,000語以内
研究ノート・研究サーヴェイ

8,000語以内

書評論文 5,000語以内

書評 1,500~3,500語

(注)語(words)とは、タイプライターのマージン幅タッチ数に行数を乗じ、これを定数6で割った値を指します。原稿は上下左右のマージンをゆったり取り、必ずダブル・スペースで打って、審査委員がコメントを書きこみやすいようにしてください。

○和文の場合、300語以内の欧文要約を添付してください。打ちかたは上と同じです。

○完成原稿には氏名を記入せずに送りください。

発送先：日本ラテンアメリカ学会

年報編集委員会

〒162 東京都新宿区市ヶ谷本村町42 アジア経済研究所

中南米総合研究プロジェクト気付

電 03-3353-4231(内271)

FAX 03-3226-8475

図版：図版トレースは、執筆者に作成いただくか、そうでなければ実費を申し受けます。初稿段階ではスケッチで構いません。写真の場合も、スライド紙焼き代等は執筆者負担です。

審査委員 原稿1本につき2名以上。

氏名は公表しません。

石井 章(理事)

うに。天候異変となると、とかく悪化にされるのは、ペルー沖のエルニーニョ。別段私たちには関係ないとはいえる、「エルニーニョ」が新聞紙面に踊るようになると、何となく不愉快になるのは、ラ米研究者故であろうか。

コーヒーはもとより、ブドウやかぼちゃもラ米産が届く昨今である。秋の味覚の松茸もメキシコ産とか。地球の反対側の天候を気にしながら現地調査の荷造りをしているのは、私だけではないだろう。日本から最も遠方の地域をフィールドとするラ米研究者にとって、待ちに待った季節が始まる。(堀坂浩太郎)

No.54 1995年7月31日発行

〒565 大阪府吹田市千里万博公園内

国立民族学博物館

地域研究企画交流センター気付

日本ラテンアメリカ学会事務局

電 06-878-8334

(山田研究室、火一木曜)、

Fax 06-878-8353

e-mail yamadajc@idc.

minpaku.ac.jp

電 06-878-8343

(菊田事務官)